

すまいるたうん



第290号
平成26年

6月23日

看護師つれづれ日記②

「最初で最後のありがとう」

「最期に立ち合う」

多くの方々を看取って来た看護師さんに手記を書いて頂きました。

「温かい尿」

Bさんは私が初めて看取った方です。明け方、最期の時が近づいていました。血圧を測定しようとしたら、医師が首を振りました。その意味に気づき静かに見守りました。ゆっくりと静かに旅立たれた後、Bさんの身体に装着していたモニター・点滴・尿の管を外します。さっきまで生きていたと思うと手にしたまだ温かいBさんの尿が捨てられませんでしたが、死の瞬間に立ち合ったのかもしれない

いが、生きている最期の瞬間でもあったんだと思うと、人の人生の節目に関わるこの仕事が怖くなりました。その方の最後に立ち合うのにふさわしい人になろうと心に決めて、Bさんの生きていた証の最期のおしっこを泣きながら捨てました。

「最初で最後のありがとう」

身寄りのないCさんの最期は、医師、私ともう一人のナースだけが立ち合いました。日々状態が悪化し、Cさん本人は苦しいため何をしても文句だけしか出てきませんでした。

「もう死ぬんでしょ？」 「いつ死ぬ」

「苦しいの嫌だよ」もう限界だろうとい

う頃にCさんの弱音を初めて聞きました。

一人で怖かったらもうと思いません。でも、

その後も毎日毎日文句を言い続け「早く

死にたい。死んだほうが楽だ。」 「治せ

ないなら来るな。」と叫んでました。

「苦しいのは嫌だから、わかった？」 C

さんは亡くなる前日に医師にまた強い口

調で言っていました。 そんなCさんの

最期の言葉は「ありがとう」でした。

「治せないなら来るな」と言われ続けな

がらも部屋に伺って良かった。きつと強

い事を言っていないとCさんじゃなかつ

たのだと思います。

いろいろな生き方をされ、私よりも何

倍も年上のCさん、看取らせて頂き、こ

ちらこそ、ありがとうございます。

「最期は看取ってね」

Dさんは手術、抗がん剤、在宅医療で

7年近く闘病された方でした。ご家族と

も長いお付き合いでした。面会に来たご

主人が帰る時には、窓からDさんと一緒

に見送りました。

「今度来る時は最期だから。」

「最期は看取ってね。約束してね。」

Dさんは自身の病気の全てを知り、退

入院され、明け方まで一緒に過ごして、

穏やかに旅立たれました。手術・抗がん

剤をして頑張っておられた時期、余命を

宣告された日、残りの時間を在宅で過ご

そうと決めた日、その時その場面に関わ

らせて頂きました。最期は私にと選んで

下さったことをありがとうございます。D

さんに恥じないようなナースになります。

ならなければいけないとご遺体に心の中

で言いました。

天国のDさん、今の私はどうですか。

「病気とひきかえに」

「病気の代わりにあなたに出会えた。自

分の理解者がこんなに近くにいたなんて」

再発と治療を繰り返したEさんから頂

いた手紙に感謝の言葉と共に書かれてい

た言葉です。まだまだ力不足の私にと思

うと、嬉しいのと悔しいのと複雑な気持

ちで、手紙を前に涙が止まりませんでし

た。

「看護師は人の生死に関わる素晴らしい

仕事だ」とよく聞きますが、そう言える

のはそれにふさわしい人間性を持ったナ

スだけだと思います。他人の生死に関わ

る仕事なので、それなりの人間性を

を要します。「これでいい」「ここまで

でいい」という事はないと思います。人

間性を持ったナースになります。

Eさんから頂いたお手紙は、私の宝物

です。お守りです。